

「新時代とやまハイスクール構想」 に対する提言

～「高校再編のモデルを富山から」～

令和 7 年 8 月 21 日

自民党富山県議会議員会

第 2 期富山県教育の未来を考える PT

顧問	武田 慎一		
座長	永森 直人		
事務局長	瀬川 侑希		
メンバー	川島 国	八嶋 浩久	針山 健史
	安達 孝彦	大門 良輔	谷村 一成
	立村 好司	瀧田 孝吉	鍋嶋 慎一郎
	寺口 智之	尾山 謙二郎	横田 誠二

自民党富山県議会議員会では、令和 5 年 6 月に「富山県教育の未来を考えるプロジェクトチーム（教育 PT）」を立ち上げ、主に、県立高校再編に向けての調査・研究を行ってきた。

具体的には、市町村長や全日制・定時制全ての県立高校との意見交換の実施や県外の先進事例の視察、全 7 回に及ぶ地域住民を対象としたタウンミーティングの実施などに取り組み、令和 6 年 12 月には、「県立高校再編に向けた提言」として取りまとめ、知事に提出した。

令和 7 年 3 月には、総合教育会議において、「新時代とやまハイスクール構想基本方針」が取りまとめられ、その内容には、教育 PT による提言内容も、一定程度取り込んでいただき、評価している。

一方で、今年度は、「新時代とやまハイスクール構想検討会議」が新たに設置され、検討が進められているが、大規模校の設置方針が、二転三転する姿からは、「なんのために高校再編を行うのか？」という、本質的な部分の検討が十分になされておらず、場当たりの対応となっているのではとの懸念も拭うことができない。

一昨日に公表された実施方針（素案）においても、令和 20 年度までに設置される学校の姿は、学校数や規模は明確となっている一方で、学校の中身については、大規模校や中高一貫校などを除けば、現時点で抽象的かつ不明確（既存の学科やコースの再配置）な印象であり、新しい学校がどう生み出されていくのかイメージを持ちにくい。

「新時代とやまハイスクール構想」は、行ってみたい・学んでみたい学校の選択肢を具体的に県民に示し、社会のあり方が大きく変わる中で、「富山県の高校教育も変わる」という明確な意思を県民に示すことに本質があると我々は、認識している。

こうしたことを踏まえ、教育 PT において、「新時代とやまハイスクール構想に対する提言」を提出するものであり、その趣旨を十分に踏まえた高校再編となるよう、強く要望するものである。

1 高校再編の目的を明確にすること

高校再編は高校教育改革のためであることを大前提とし、**偏差値を過度に重視する教育からの脱却**を目的とする必要がある。

富山県に限らず、高校教育は、中学生や保護者が「偏差値」で高校を選ぶ傾向が強い。学力偏差値により学校が序列化・ブランド化されていると言っても、言い過ぎではないと考える。

同質性・均質性ある人材が社会を牽引する時代にあっては、似たような学力レベルの生徒が集まり、切磋琢磨することに一定の意義があったと考えるが、高度な情報化社会を迎え、今後も人工知能が飛躍的に進化する事が明らかな現代において、人間に求められる能力は大きく変化している。

最も重要なことは、生徒が、高校生活を通じて、多様な生き方や幸せの形を知り、選択していく力を養うことであり、何よりも、一人ひとりの生徒が、自らの可能性や潜在能力を発見する機会が与えられることであると考ええる。

「学力偏差値」が重要な一つの基準であることは確かであるが、一方で、15歳時点の学力偏差値のみで子どもを仕分けするかのような、現在の高校教育のあり方は、子どもにとって「ウェルビーイング」な状態とは到底言えず、今回の高校再編において解決すべき、最も大きな課題であり、論点であると考える。

「子どもたちは、なんのために高校に行くのか?」。その課題を十分に議論したうえで高校再編となるよう求める。

2 具体的な全体像を示し、よりスピード感ある対応を行うこと

「新時代とやまハイスクール構想」における県立高校の目指すべき姿は、大規模校のあり方などを除けば、具体性に乏しく、既存の高校の単なる統廃合となってしまう懸念がある。

今回の構想において、最終形となる新設校等の姿を、具体的かつ明確にし、新しい県立高校の姿を、県民にしっかりとしたメッセージとして伝える必要がある。

また、再編の期間についても、時代の変化の激しさを考えれば、令和20年までとは、スピード感に欠けることから、5年程度前倒し（令和15年まで）で再編を進める必要がある。

特に、段階的（※）に行う再編の第三期（R20）は13年後となることから、誰がこの再編に責任を持つのか不明瞭になる懸念がある。

今回のハイスクール構想を責任持って実現し、新しい富山県教育を県民に届けるために、令和15年までの高校再編計画を具体的な高校名を挙げて、今後2年程度で練り上げ、準備が整った学校から順次再編を進めるべきである。

（※）県の実施方針では、具体的な再編計画は、第二期（R15）は、R10以降、第三期（R20）は、R15以降に検討されることになっている。

3 新たなタイプの高校教育の提案

生徒が、学力偏差値と異なる評価軸で学校を選択する環境を整備することが求められており、そのためには、学力を含め多様な生徒が集う学校、特色ある新しいタイプの学校をつくる必要がある。

（1）中高一貫（探究）＋スポーツ・芸術＋職業系学科など

現在の県立高校においては、同程度の学力を有する生徒が1つの学校に集まる傾向となっているが、多様な人と関わりを持つことができる新しいタイプの学校の選択肢とする。

（2）総合選択型大規模普通科校

多様な選択科目の中から、自分の興味や進路に合わせて学習計画を立て、主体的に学ぶことができる「総合選択型大規模校」という新しいタイプの学校の選択肢とする。

（3）グローバル教育学校

国際バカロレアやケンブリッジ国際教育プログラムなど数学や理科などの授業が英語で実施される学校や、海外留学など含め英語を深く学ぶ学校など、グローバルな活躍を目指す生徒への新たな選択肢とする。

（4）英語に特化した普通科校

（3）とは別に、自分の強みを伸ばし、あるいは富山県と世界の交流がより進む社会を見据え、英会話や英語圏とのオンラインプログラムがとにかく豊富な、英語を自分の武器にしたい生徒への新たな選択肢とする。

（5）探究的な学びができる市町村連携型小規模校（総合学科高校）

自分のペースで探究的・主体的に学びたい生徒のための新たな選択肢とする。

意欲ある市町村と連携した、全寮制全国募集型の学校を視野に入れた検討を行うこととする。

（6）新しいタイプの工業高校（総合工科高校）

工業高校に、理数科を設置。理数工学に関する高度で実践的な知識・技術を身に付け、モノづくり企業の技術開発者や理工系大学を目指すテクノロジストを育成する新たな選択肢とする。

（7）自然との共生や主体的な学びを重視した新しい高校

豊かな自然環境の中で、中山間地域などの地域課題に触れながら、同時にグローバルな繋がりも深め、予測不能な社会を生き抜いていく力を身につけるための主体的学びを重視した全寮制全国募集型の新しい学校の選択肢とする。

(8) 新しいタイプの商業高校

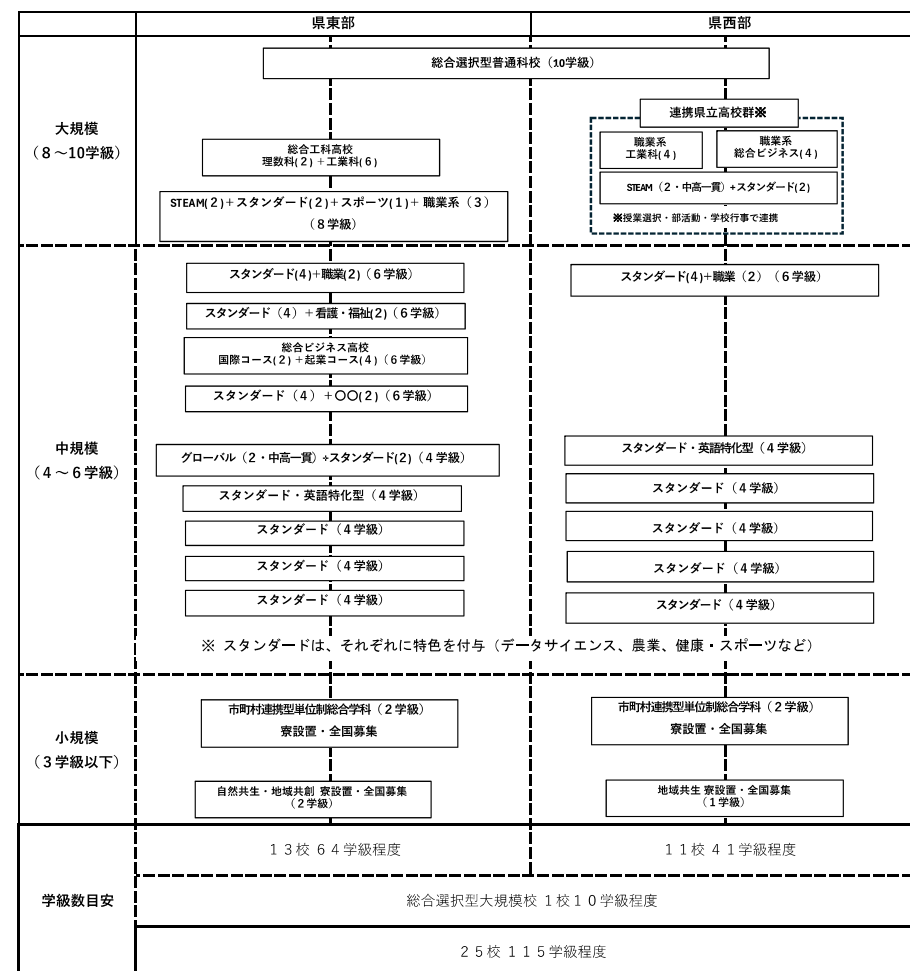
会計や経営など含めた従来型の商業科のカリキュラムに加え、プログラミングなどの情報処理技術、英会話力などを養成するとともに、起業家を講師に招いての実践的な講義を行うなど起業家育成に特化した新しい学校の選択肢とする。

(9) なお、(1)～(8)の新しいタイプの学校については、任期を定めて、校長先生を公募（民間人含む）登用することを原則とする。

4 令和20年頃を見据えての高校配置の姿の提案

令和20年までの中学校卒業生数の減少を見通し、私立高校の配置（※）など含め地域バランスも考慮して、令和15年度までに実現すべき全日制高校の配置数は、9校減の25校（115学級程度）とすることを提言し、その具体的な配置を、以下のとおり提案する。

※R8年度私立高校定員は、県東部7校・1,370名、県西部3校・630名。



5 その他に取り組むべき課題の解決

(1) 校舎など学校施設のアップデート

若手教員との意見交換の中で、狭い教室や鍵のかからないロッカーなど学校施設の充実を求める声が多くあった。

学び方の変化やプライバシーへの配慮などから学校施設そのもののアップデートも急ぐ必要がある。

なお、現状において、大規模校については、校舎の新設とされているが、スピード感や予算上の制約を考えれば、既存の学校に新棟を増設するなどの対応で十分ではないかと考える。

むしろ、最終的に残ると考えられる全ての学校について、生徒や教員のニーズにあった環境整備を行うことに予算を割くべきであると考ええる。

(2) キャリア教育の充実

自らのキャリアについて考えたことのある人の学習意欲は、格段に高いと言われている。

現状の高校教育では、自らのキャリアについて考える機会は依然として乏しく、進学重視の傾向が強いといえる。

「社会へ羽ばたく17歳の挑戦」事業について、より職業や社会に触れる機会となるように充実を図る必要がある。

(3) 入試制度改革

高校入試制度改革については、広島県教育委員会の改革事例なども参考として、調査書（内申点）の記載内容の簡略化、「学力検査」と「調査書」の配点の傾斜配分の導入などが必要と考える。また、その高校を特徴づける特定の科目への傾斜配分や、高校が求める人物像（アドミッションポリシー）に合致する学生を選抜するための総合型選抜など、学校ごとの基準があってもよい。

「高校再編による学校の特色化」と「入試制度改革」は、表裏一体のものであり、総合的な学力（偏差値）のみで学校が選択されてきた流れから、自分の強みなどを生かした学校選択ができるように、早期に改革の検討に着手する必要がある。

(4) 学校と公共交通の関係

学校統合を行う際に、交通アクセスを重視する視点を持つ必要がある。

同時に学校統合により通学選択肢が狭くならないように、「公共交通（バス増便など）への支援」、「通学による家計の経済的負担を軽減する通学定期券補助金」などをセットで行うことが必要であり、部局横断的な検討を求める。

(参考) 新しいタイプの学校の具体的な事例

1 中高一貫（探究）＋スポーツ・芸術＋職業系学科など

(1) 学校名 洛北高校（京都府立）

学級数 7学級

(サイエンス・中高一貫2、普・文理4、普・スポーツ1)

学校概要 偏差値や特徴の違う学科が混在することにより、生徒は多様な価値観に触れることができる。変化の激しい時代に違う集団が交じり合うことの意味は大きく、活気に繋がっている。



(2) 学校名 札幌国際情報高校（北海道立）

学級数 8学級（普通科2、国際文化科2、理数工学科(工業科)1、グローバルビジネス科（商業科）3）

学校概要 普通科は探究活動を重視、国際文化科は、英語を最大27単位取得可能、理数工学科は、進学型工業科で英数理の授業充実、グローバルビジネスは進学型商業科。1年時は、4学科の Mix ホームルームで、多様な生徒が互いに刺激を受け合いながら学べる仕組みづくり。



2 総合選択型大規模普通科校

- (1) 学校名 伊奈総合学園高校
学級数 18 学級
学校概要 総合選択型普通科校。学校の規模が大きく、標準の高校の約 3 校分の生徒（約 2,400 人）が在籍している。そのため「ハウス」と呼ばれる 6 つの校舎と教科棟により構成。

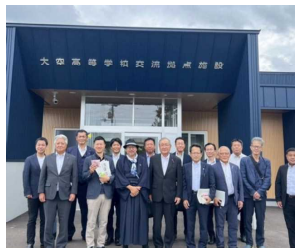
3 グローバル教育学校

- (1) 学校名 高知国際高校
学級数 7 学級（グローバル科・中高一貫 2、普通科 5）
学校概要 課題解決先進県を目指し、「変化に対応できる」「課題解決能力がある」「グローバル人材」な生徒を育成。グローバル科では、国際バカロレアプログラムを活用。



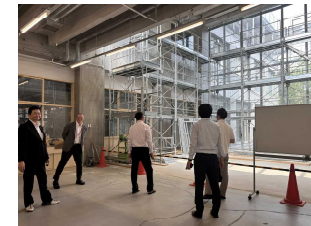
5 探究的な学びができる市町村連携型小規模校（総合学科高校）

- (1) 学校名 大空高校（大空町立）※人口 6,600 人
学級数 2 学級
学校概要 総合学科の特色と、小規模校のメリットを活かし、一人ひとりの進路実現や学ぶ意欲に応える学校。町で生徒寮を建設し、道内外から生徒を集め、公設塾を完備して一人ひとりの学びのニーズに応える学校。



6 新しいタイプの工業高校（総合工科高校）

- (1) 学校名 愛知総合工科高校（愛知県立）
学級数 8 学級（専攻科あり，R8 から中高一貫校）
学校概要 約 10 年前に伝統ある工業高校 2 校を統合し新設され、初代校長が「旋盤を回せる東大生を出す」と意気込んだ進学ニーズにも対応する理工科を設置する工業高校



7 自然との共生や主体的な学びを重視した新しい高校

- (1) 学校名 FC 今治高校里山校（私立）
学級数 2 学級
学校概要 「自分で徹底的に判断、選択する」「夢中になれることを見つける」「修羅場と向き合い、決断し、乗り切る力を身に付ける」ことを目指し、「キャプテンシップ」をコンセプトにする。先生、生徒ともに全国から募集。
通常の学校では 102～104 単位取得するが、76 単位まで減らし、空いた時間で特徴的な取り組みを行う。特に、野外活動や地域の大人との繋がりなど、学校から飛び出すことを意識している。



- (2) 学校名 神山まると高専（私立）
学級数 1学級（デザイン・エンジニアリング学科）
学校概要 育てる人物像を「モノをつくる力で、コトを起こす人」と定め、テクノロジー×デザイン×起業家精神を3つの柱として、単にアントレプレナーシップを身につけるだけでなく、自分で手を動かし、実現していく人を育てることを目指す。文系や理系といった概念にとらわれず、3つを柱に、「全部まるとと学べる」を新たにつくる。



8 新しいタイプの商業高校

- (1) 学校名 尾道商業（広島県立）
学級数 5学級
学校概要 徹底した探究学習を進める商業高校へのアップデートの事例。小学科(商業、会計、情報)をすべて廃止し、情報ビジネス学科1つに統合。カリキュラムの作成には教育コンサル「キャリアリンク」が全面的に関わっており、生徒も変わったがなによりも先生が変わった。マスターループリックによる評価（発信力、想像力、協働力、行動力）で結果は着実にしている。

